

仏弟子となる

浄土真宗の法名・帰敬式

内藤 昭文

もくじ

一、はじめに	4
二、仏教徒としての名告り	6
①法名と戒名の違い	8
②インドにおける仏教徒	10
三、初転法輪の逸話から	12
四、「自灯明・法灯明」の説法の逸話から	17
①「自灯明」の「自」とは	19
②釈尊遺言の説法	25
③「法灯明」の「法」とは	30
五、法名を授かる儀式（帰敬式）	35
六、法名を授かる意味	38
七、まとめ	44

本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』と略記しております。

一、はじめに

「法名」^{ほうみやう}とは、お釈迦さま^{しやくか}（釈尊^{しやくそん}）の弟子（仏弟子）としていただく^{しやく}「釋（釈）○○○」という名前であり、苦惱多き人生を「南無阿弥陀仏」^{なむあみだぶつ}と念仏申しつつ、喜びと感謝を味わいながら生き抜くことを表明するものです。そして、「帰敬式」^{ききやうしき}とは、仏（如来^{こらい}）に代わって本願寺住職（ご門主さま^{もんしゅ}）から仏弟子（仏教徒・念仏者）の名告りである「法名」をいただく儀式です。

本書では、その「法名」や「帰敬式」に関して、お釈迦さまと仏弟子のエピソードなどを交えながら、念仏者としての領解^{りょうげ}や味わいを書かせていただくこ

と 생각합니다。

そして、すでに「法名」をいただいた方にとつても、まだいただいていない方にとつても、本書が「法名」を名告る意義を考える一助になればと念じます。

また、この苦難多き人生を仏弟子（仏教徒・念仏者）として生きるよろこびを味わう縁となれば幸いです。

さらに、「法名」をいただいていない方の中で、一人でも「帰敬式」を受けようという思いを発していただければ、望外の慶びです。

一、はじめに



西本願寺・御影堂

二、仏教徒としての名告り

さて、「釋○○」という名告りが仏弟子を意味するようになったのは、中国仏教の基礎を築いた出家僧の一人、道安(三一四―三八五年)が起源とされます。

中国には、紀元前後にインドから仏教が伝播しました。道安以前は出家者が善知識(師匠)から名前をいただく場合、名前の上に善知識の「姓」を付けることが多く、しかもその「姓」は出身地を意味する場合があります。例えば、道安の師匠は仏図澄(不詳―三四八年)ですが、その弟子たちの多くは「竺○○」というように、「竺(インド)」の一字をもって「姓」としました。

他には「支(大月氏・中央アジア)」「安(バルチア・古代インド)」「康(サマルカンド)」などが代表的です。

しかし、道安は「竺」をもって名告らず、「釋道安」と名告ったのです。それは「大師のもとに釈迦」「牟尼仏」より尊きはない」という理由からでした。つまり、具体的な師匠である善知識の弟子であるという自覚以上に、その善知識が帰依するお釈迦さま(釈尊)の弟子であるという自覚から、「釋道安」と名告ったのです。この「釋」をもって「釋氏(仏教徒)」であることを名告る習慣が中国で広まり、日本でも継承されることになりました。

ちなみに、この自覚は唯田房記述とされる『歎異抄』に伝わる「親鸞は弟子一人ももたず候ふ」(『註釈版聖典』八三五頁)という言葉に通じます。すなわ